

# 山内盛彬による戦前期の音楽活動 音楽会プログラムを史料として

三 島 わかな

## 1．山内の創作活動に関する研究現状と、本稿の目的および方法

山内盛彬<sup>1</sup>の音楽活動は、沖縄県師範学校学生時代の明治末期にはじまり、その後、第二次世界大戦をはさんで長きにわたって継続された。その活動は、二十世紀をほぼカバーしているといっても過言ではない。また、山内の音楽活動は多岐にわたる。琉球古典音楽研究については、ここで改めて言うに及ばず、さらに琉球古典音楽（湛水流）の伝承者としての活動をはじめ、御座楽などの古楽復興や洋楽演奏などもおこなった。これらの研究や演奏に加え、山内は戦前戦後にかけて数多くの音楽作品を創作している。

従来の研究の範囲では、山内の創作作品を網羅したうえでの作品評価はなされていない。もっとも、山内の著作に関する集大成的な復刻出版として『山内盛彬著作集』<sup>2</sup>が存在する。同著作集の付録に収録された年譜には、山内が戦後に創作した《ひやみかち節》などの一部の曲名が記載されているものの、しかしながら同著作集の刊行は創作曲の収録を目的としたものではなかった。このような研究段階を前提として、今後の山内研究にもとめられることは、ひとつに、回想録および同時代史料を突き合わせて山内の創作作品名を確定すること、ふたつに、現存する作品（楽譜や録音資料）の収集作業ならびに復刻作業をも含めて創作作品を集成することであろう。

筆者はまず、その手始めとして、山内の幅広い創作ジャンルのなかでも、唱歌劇ならびに新民謡のジャンルを対象として、新発見史料を中心に論述した（三島2009）。その成果をふまえ、ひきつづき戦前期の山内の音楽創作に関する研究の一部分を構成する本稿では、さらに、山内による音楽会活動の推移を整理する。そこから、音楽会という生演奏の場で発表された山内の創作ジャンルと、その様式について言及したい。なかでも、同時代の創作上の一潮流である新日本音楽の創造という観点から、考察を試みたい。

## 2．戦前期の創作ジャンルの概観、および創作背景

山内の回想録<sup>3</sup>をひもとくならば、戦前期における山内の創作は、①唱歌劇、②民謡を題材とした創作化（新民謡を含む）、③童謡、以上の三ジャンルにわたるものだったという。それぞれのジャンルについて、創作の背景を大まかに説明しておきたい。

まず、①唱歌劇は、代表作《黄金の瓜ざね》をはじめとして、山内が宮城島尋常小学校で教鞭をとっていた大正期の後半の年代に創作されたと推定される<sup>4</sup>。その当時、唱歌劇というジャンルに対する賛否両論があったものの、唱歌劇は教育界で全国的に流行した。若き山内が学校教員として、沖縄の教育現場に従事したからこそ、創作されたジャンルが唱歌劇だといえる。

つぎに、②新民謡ならびに③童謡の創作背景について述べたい。昭和初期に活動の拠点を東京に移した山内は、同時期にビクターレコード会社の専属作曲家としても活動を展開した<sup>5</sup>。したがって、山内が創作した新民謡や童謡作品のほとんどが、昭和初期の年代に創作されたと考えられ<sup>6</sup>、それらの楽曲の多くが、レコードという媒体を通して日本社会で受容されたものだった<sup>7</sup>。つまり、前述した唱歌劇のジャンルとは異なり、沖縄という地域や教育の現場に限定されず、日本社会でひろく受容されたジャンルが、山内の新民謡や童謡作品だと言える。

山内が回想録のなかで語った情報のみにもとづくならば、戦前期の山内が創作した音楽ジャンルは以上に述べた範囲にとどまることになる。だがしかし、さらに戦前期の一次史料から得られた情報を加えるならば、④新楽器（玲琴）のための器楽曲、⑤ダンス・舞踊曲、⑥映画音楽、などのジャンルにも山内が創作していたことが判明する。そのなかでも、④新楽器（玲琴）のための器楽曲、ならびに⑤ダンス・舞踊曲のジャンルは、山内が主催した昭和初期の音楽会プログラムを構成する主要なジャンルとなっている。

以上に述べたように、後年の山内による回想録ならびに一次史料にもとづく情報を総合するならば、戦前期に山内が創作した作品は76曲に及んでいる。現在までの調査で判明した、山内の戦前の創作曲に関するデータは【表1】の通りである<sup>8</sup>。

【表1】山内盛彬による戦前期の創作曲一覧

作業番号	楽曲名	ジャンル	収録作品名	楽譜の種類	作曲年代	作詞	作曲		
1	久高島の歌	唱歌劇	黄金の瓜びね	楽譜未確認	1920?	*	山内盛彬		
2	なやみの曲	唱歌劇	黄金の瓜びね	楽譜未確認	1920?	*	山内盛彬		
3	祈禱の曲(いのり)	唱歌劇	黄金の瓜びね	手稿譜(五線譜+工四の符)	1920?	*	山内盛彬		
4	母子の別れ	唱歌劇	黄金の瓜びね	楽譜未確認	1920?	*	山内盛彬		
5	赤子の唄	唱歌劇	黄金の瓜びね	楽譜未確認	1920?	*	山内盛彬		
6	ウハハッパツの歌	唱歌劇	黄金の瓜びね	楽譜未確認	1920?	*	山内盛彬		
7	タイトル表記無し	唱歌劇	黄金の瓜びね	楽譜未確認	1920?	*	山内盛彬		
8	*	劇	人形病院	楽譜未確認	1930以前	*	山内盛彬		
作業番号	曲名	ジャンル	レーベル・NO.収録作品名	楽譜の種類	作曲年代	発表年	独唱	蛇彦線	その他演奏者
9	四季	琉球新民謡	トンボ印ニッポンレコード(試作品)	手稿譜	1922?	1925-1930?	川平喜久子	山内冷光	山内冷光
10	取たる金は(取ったる金)	琉球新民謡	トンボ印ニッポンレコード(試作品)	手稿譜	1922?	1925-1930?	川平喜久子	山内冷光	山内冷光
11	與那國小猫(與那國の小猫)	琉球新民謡	トンボ印ニッポンレコード-15015-A	手稿譜	1922?	1925-1930?	川平喜久子	山内冷光	山内冷光
12	奄美節	琉球新民謡	トンボ印ニッポンレコード-15015-B	手稿譜	1922?	1925-1930?	川平喜久子	山内冷光	山内冷光
作業番号	曲名	ジャンル	レーベル・NO.収録作品集名	楽譜の種類	作曲年代	発表・発行年	作詞	作曲	歌手/伴奏
13	社の薨	新民謡	*	手稿譜	1922?	*	*	山内盛彬	
14	四季くどき	新民謡	*	手稿譜	1922?	*	*	山内盛彬	
15	わたしや南国の	新民謡	*	楽譜未確認	1930以前	*	*	山内盛彬	
16	旅の道筋	新民謡	*	楽譜未確認	1930以前	*	*	山内盛彬	
17	世界を象として	唱歌	*	楽譜未確認	1930以前	*	*	山内盛彬	
18	軍国こども語り	童謡	新興-30	楽譜未確認	*	*	北山しげり	山内冷光	村田美代子、外合唱
19	お猿の兵隊さん	童謡	新興-	楽譜未確認	*	*	川村敬太郎	山内冷光	村田美代子、外合唱
20	おもちゃのお馬	童謡	新レノマル-5028	楽譜未確認	*	*	川村敬太郎	山内冷光	村田美代子
21	僕の重機	童謡	新レノマル-5046	楽譜未確認	*	*	高島敬雄	山内冷光	並木輝子
22	強い日本の兵隊さん	童謡	新レノマル-	楽譜未確認	*	*	宮本隆美	山内冷光	並木輝子
23	南々南京街	童謡	コロムビア-	楽譜未確認	*	*	須永滝一郎	山内冷光	八木静枝
24	月夜の渚	流行歌/童謡	4196/臣面	楽譜未確認	*	1932	野口雨情	山内冷光	歌詠文/タハヘイコウス
25	人形の花嫁	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	島田芳文	山内冷光	
26	春こいこい	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	若杉健三郎	山内冷光	
27	タンクタンククロウ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	高橋静湖	山内冷光	
28	鐘が鳴る	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	島田芳文	山内冷光	
29	ヨット浮べこ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	西崎義雄	山内冷光	
30	彩霞みごっこ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	島田芳文	山内冷光	
31	いたづら時計	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	大村主計	山内冷光	
32	鰻の餅曳き	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	須川鴻一郎	山内冷光	
33	こんこん小石	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	島田芳文	山内冷光	
34	コロスケウホウ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	林柳波	山内冷光	
35	カツチリ雀	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	岩城源一郎	山内冷光	
36	猿廻し	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	島田芳文	山内冷光	
37	お山の大將	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	波多野狂夢	山内冷光	
38	私のボチ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	島田芳文	山内冷光	
39	兵隊あそび	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	篠原雅雄	山内冷光	
40	かくれんぼ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	松島健太郎	山内冷光	
41	蛙の夜学校	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	島田芳文	山内冷光	
42	いたちの米とぎ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	澤渡吉彦	山内冷光	
43	ツバメの飛行家	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	波多野狂夢	山内冷光	
44	竹馬小馬	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	清水清	山内冷光	
45	とんまのトンビ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	篠原雅彦	山内冷光	
46	ままごと遊び	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	荒波太郎	山内冷光	
47	よいよいよい子	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	島田芳文	山内冷光	
48	にらめっこ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	今井十九二	山内冷光	
49	みんなの公園	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	渡邊善徳	山内冷光	
50	シヤツクワコ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	鈴木勝	山内冷光	
51	おもちゃの戦争	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	島田芳文	山内冷光	
52	狸踊り	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	石澤欽之助	山内冷光	
53	大坊主小坊主	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	淺沼逸	山内冷光	
54	雷ごらちゃん	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	島田芳文	山内冷光	
55	おちいさんのお囃し	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	石澤欽之助	山内冷光	
56	坊やお夢	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	島田芳文	山内冷光	
57	とんぼの空中戦	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	志村樂吾	山内冷光	
58	ねづみの兵隊さん	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	荒波太郎	山内冷光	
59	だるまの兵隊さん	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	加藤春香	山内冷光	
60	防空ごっこ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	高安啓示	山内冷光	
61	吊り橋渡りよ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	松原有二	山内冷光	
62	糞とび	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	小原義正	山内冷光	
63	コー ストップ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	谷川歩	山内冷光	
64	遊ぼう学ぼう	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	嵯原芳郎	山内冷光	
65	私の人形さん	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	今井十九二	山内冷光	
66	かごさん床屋(物語童謡)	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	畑中正澄	山内冷光	
67	ねづみのかくれんぼ	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	冨崎達	山内冷光	
68	像さんてつくり	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	高橋都	山内冷光	
69	月夜の渚(民謡)	童謡	山内冷光童謡曲集	出版譜	*	1934.5.10	野口雨情	山内冷光	

70	金魚の舞姫	童謡	*	／仲吉史子氏による編曲手稿譜	1938?	*	山内伶晃	山内伶晃	仲吉史子
71	譯詩民謡	瑤琴作品	*	／楽譜未確認	1930以前	*	*	山内伶晃	
72	東京復興歌へ歌	ダンス曲	*	／楽譜未確認	1930以前	*	*	山内伶晃	
73	盆踊（「琉球情調」の一篇）	*	阿旦のかけ	／楽譜未確認	1917-1921?	1922.2.15	世禮國男	山内盛彬	
74	白い煙 黒い煙	歌謡曲?	*	／比嘉悦子氏による五線譜翻訳（原譜は工工四）	1918-1931?	1950?	稲垣國三郎	山内盛彬	
75	南の島へ	歌謡曲?	*	／比嘉悦子氏による五線譜翻訳（原譜は工工四）	*	1950?	島田春雄	山内盛彬	
作業番号	作品名	ジャンル		制作／企画	作曲年代	制作年	監修	音楽	
76	琉球の風物	映画音楽		大日本文化映画製作所／日本民藝協会	*	1940	徳宗茂、式根隆三郎	橋本千、山内伶晃	

【凡例】該当データの記載がない場合には、表中欄内に\*印を付した。推定年には、表中欄内に?印を付した。

### 3．戦前の史料に確認できる音楽会活動と作品発表

#### 3 - 1 考察の対象曲

【表1】のデータが示すとおり、戦前期の山内の創作曲のなかにはレコーディングを前提として創作された楽曲が少なからずみられる。その一方で、レコードという媒体によらない山内の創作ジャンルの受容について考えた場合、やはり音楽会という場は重要だったと考えられる。というのも、明治44（1911）年以降、数々の音楽会を企画・出演した山内だった。大正初期以降の山内は、沖縄の三線音楽の演奏や、あるいは明清楽に由来する琉球国時代の楽種を復興演奏した。さらに山内は昭和初期あたりから、自作品の発表を目的とした音楽会を開催しはじめている。

なお、前掲【表1】に記載された山内の創作曲のうち、戦前の音楽会で演奏された作品は、網かけをほどこした六つの作品（作業番号8、15、16、17、71、72）である。したがって本節では以下に、これらの六つの創作曲を対象として論じることとする。

#### 3 - 2 大正3年以前の音楽会プログラムの分析

戦前期の山内が関与した音楽会のプログラムの内容を把握するために、昭和20（1945）年以前に発刊された一次史料を渉猟し、山内による音楽会活動や創作活動に関する記録を整理した。その結果が【表2】<sup>9</sup>である。

【表2】山内盛彬 関連音楽会データ一覧（戦前期・1911～1930年）

作業番号	音楽会開催年月日 *データ掲載年月日	データ出典名	音楽会名	演奏形態・ジャンル名 (山内作品もしくは山内による演奏のみ抜粋)	演奏曲目 (山内作品もしくは山内による演奏のみ抜粋)
01	1911.12.3 *1911.11.30	沖縄毎日新聞	音楽演奏会	ヴァイオリン独奏： 絃楽四部：	バッハ作曲《ガボット》 《薔薇の歌》《モルゲンリート》
02	1911.12.3 *1911.11.30	琉球新報	音楽演奏会	ヴァイオリン独奏： 絃楽四部：	バッハ作曲《ガボット》 英国民謡《薔薇の歌》《モルゲンリート》
03	1911.8.25	私の戦後史	潜水野村両流伝授披露会	—	—
04	*1913.8.2	沖縄毎日新聞	福音社祝賀音楽会	二部合唱： ヴァイオリン独奏：	《ホームスイートホーム》《讃美歌 第53番》 御座楽（オヴチドワフ） 踏次楽（サンポーヤン）（四段）
05	*1913.9.10	沖縄毎日新聞	故尚泰侯十三年記念講話会	—	踏次楽
06	*1914.2.4	沖縄毎日新聞	慈善音楽会演奏曲目	ヴァイオリン合奏： ヴァイオリン独奏：	琉球音楽 琉球音楽
07	*1914.2.5	沖縄毎日新聞	慈善音楽会演奏曲目	ヴァイオリン独奏：	—
08	*1914.2.8	沖縄毎日新聞	第五回 家庭音楽会	—	箏：《六段》 [三線]：潜水流《揚作田節》 ヴァイオリン：踏次楽《四段》《クワナ》《瀧落》
09	*1914.2.9	琉球新報	楽しい音楽会： 山内氏家庭音楽会	ヴァイオリン： [三線による二重唱]：	踏次楽《四段》 潜水流《揚作田節》
10	*1914.3.15	琉球新報	発展社記念演劇	バイオリン： バイオリン合奏：	踏次楽《三段》 《六段》
11	*1914.3.15	琉球新報	発展社同人大演劇会	ヴァイオリン：	—
12	*1914.3.17	沖縄毎日新聞	発展社大演劇会	ヴァイオリン： ヴァイオリン合奏：	踏次楽《三段》 《六段》
13	*1930.8.25	八重山新報	音楽、舞踊の夕： 山内令晃氏の作曲発表会	三線独奏：	潜水流 —
14	*1930.8.28	先島朝日新聞	山内氏の作曲発表：娯楽の夕	ダンス： 唱歌： 民謡： [三線]： 玲琴： 劇：	《東京復興歌》 《世界を家として》 《わたしや南国の》《旅の道節》 潜水流《早作田節（揚げ出し、下げ出）》《七段曲》 《譯詩民謡》 《人形病院》

【凡例】作成者の補記による箇所は [ ] を付した。該当データの記載がない場合には、表中欄内に の記号を付した。

【表2】（作業番号01～12）にみるように、大正3（1914）年以前に開催された音楽会において山内が演奏した曲目や演奏形態については、さらに【表3】のように分類できる。

【表3】

演奏形態	ジャンル	楽曲名
(1) 合唱による演奏	西洋由来の歌曲	《ホームスイートホーム》讚美歌《第53番》
(2) オリジナル楽器演奏	沖縄の歌三線音楽 沖縄の箏曲	湛水流《揚作田節》 《六段》
(3a) 洋楽器置換による演奏	沖縄の箏曲や神歌	《六段》《瀧落》《クワイナ》
(3b) 洋楽器置換による演奏	明清楽由来の器楽	御座楽《オヴチンドウワン》 路次楽《サンボーヤン（四段）》《三段》

まず、【表3】の分類方法について説明を加えたい。大正3（1914）年以前の音楽会プログラムとして山内が実践したことは、(1) 西洋由来の歌曲を合唱スタイルで演奏し、(2) 沖縄の歌三線音楽や箏曲をオリジナル楽器（三線や箏）で演奏することだった。その一方で、(3a) 沖縄の箏曲をオリジナルの楽器（箏）は使用せずに、旋律のみを洋楽器に置き換えて演奏したり、あるいはまた神歌のジャンルを本来の歌唱にはよらずに、歌唱旋律を洋楽器に置き換えて演奏することなどが試みられている。さらに、(3b) 明清楽に由来する器楽ジャンルの演奏にあたっては、洋楽器に置き換えて演奏していた。

ここで注目すべきは、分類中の(3a)と(3b)である。なぜなら、オリジナルの楽器にはよらずに、洋楽器置換をはかった意義について考えたいからである。

まず(3a)では、沖縄の箏曲や神歌を洋楽器であるヴァイオリンに置き換えて演奏しており、同演奏形態の意義は「琉洋調和楽」を試みた点にあると言えるだろう。楽曲は沖縄の音楽でありながら、楽器編成を洋楽器に置き換えた演奏スタイルである。一方、分類中の(3b)においても(3a)と同様に、洋楽器置換ははかられているが、しかしその意義は異なる。すなわち(3b)では、明清楽に由来するジャンルを復元演奏する際に、それにともなって、今や失われてしまったオリジナルの楽器をも復元しなければならないという事情があったのだろう。したがって御座楽や路次楽の演奏の際には、やむを得なく洋楽器のヴァイオリンを代用したのだと考えられる。この場合の洋楽器導入は、あくまでも琉球国時代に使用された楽器の代用としてであり、創造的な意味合いでの「琉洋調和楽」を意図したわけではない。つまり同事例では、沖縄音楽の近代化を意図したわけではないと考えられる。

このように、山内が出演した大正3（1914）年以前の音楽会は、歌のジャンルであれ、器楽ジャンルであれ、いずれにしても既存のレパートリーを前提とした演目だった。そこで山内は、洋楽レパートリーの演奏に並行して、沖縄音楽の正統的スタイルによる演奏や、あるいは沖縄音楽の「琉洋調和楽」を試みたり、さらには琉球国時代に由来する古楽の復元演奏を企てていたのだった。

### 3 - 3 昭和5年以降の音楽会プログラムの分析

ところが、以上に述べたような傾向は、昭和初期の音楽会において一変する。つまり、【表2】（作業番号13～14）が示すように、昭和5（1930）年の音楽会において山内は、従来のような既存のレパートリーではなく、自作品を披露しはじめる。そのことは、【表2】（作業番号14）の最右列の「演奏曲目」という項目に確認することができる<sup>10</sup>。

昭和5（1930）年の夏に八重山音楽調査をおこなった山内は、その折に八重山館にて「山内令晃作品発表会」を開催した。その際のプログラムとして、【表2】（作業番号14）に記載した創作作品が披露された。しかしながら、ここにあげた山内の戦前の創作作品については、目下のところ楽譜が確認できず、その作品様式を知る手立てがない<sup>11</sup>。

山内が昭和初期に開催した音楽会プログラムの内容を分類すると、（1）歌曲作品（唱歌や新民謡）、（2）新楽器（玲琴）のための作品、（3）創作舞踊、（4）創作劇、以上の四ジャンルに分類できる。実際の作品名と対照させると【表4】のようになる。

【表4】

創作ジャンル	作品名
(1) 歌曲作品	唱歌《世界を家として》
	新民謡《わたしや南国の》《旅の道節》
(2) 新楽器のための作品	玲琴による独奏曲《譯詩民謡》
(3) 創作舞踊	ダンス《東京復興数へ歌》
(4) 創作劇	《人形病院》

ただし、前述した山内の回想内容と比較した場合、(1) 歌曲作品や(4) 創作劇などのジャンルについては回想の内容と合致しているが、しかしながら、(2) 新楽器のための作品や(3) 創作舞踊については、山内の回想では言及されていなかった。

なお、今回の調査の範囲では、大正4(1915)年から昭和4(1929)年までの期間のデータを確認することができず、同期間における山内の音楽会活動や創作活動についても不明となっている<sup>12</sup>。したがって現段階では、山内による創作作品の発表会が何年から始まったのかを特定することはできないが、早くとも大正9(1920)年以降<sup>13</sup>、遅くとも昭和5(1930)年の範囲内であったと推察できる。

## 4. 新楽器のための創作

### 4-1 玲琴曲《譯詩民謡》の創作

ここでは、【表2】(作業番号14)の演奏曲目の項目内にみられる《譯詩民謡》という作品に着目したい。現在までの調査の範囲では、同作品の楽譜が確認できないため、その作品様式については言及できない。だが、「玲琴」という新楽器によって、《譯詩民謡》が演奏されていたことは【表2】から読みとれる。

なお、玲琴に関する千葉の記述を要約すると、玲琴とはすなわち、大正11(1922)年ごろに田邊尚雄が考案した擦弦楽器であり、チェロのような低音域をもつ新型の胡弓だという<sup>14</sup>。大正期以降にはじまる新楽器の考案・開発について千葉は、「伝統からの脱皮を模索していた同時代の進歩的な邦楽家たちの共通した願望でもあった」<sup>15</sup>と述べている。したがって山内の事例でいえば、《譯詩民謡》の存在にみるように、玲琴のための作品を山内が作曲した行為には、創作活動上の山内の立場が鮮明に表われていると考えたい。つまり山内は、みずからの創作活動の一領域において、千葉の言うところの「伝統からの脱皮」を意図していたと考えられる。

実際にも山内は、昭和5(1930)年当時の言説のなかで、「私は、田邊先生の主宰して居られる新日本音楽協會にも関係して玲琴を受け持つております」<sup>16</sup>と述べている。ここで山内が言うところの「受け持つ」の意味が、玲琴を「演奏する」という意味なのか、あるいは玲琴のための作品を「創作する」という意味なのか、はっきりしない。もしくは「演奏および創作」の両面において、山内が玲琴を受



け持っていたことを意味していたのかもしれない。さりとて、新日本音楽の創造に挑んだ山内にとって、師である田邊が考案した玲琴という楽器は、山内の創作活動上、切り離せないものだったことは確かだろう。それを実証する楽曲のひとつとして、玲琴のために創作された《譯詩民謡》を位置づけることができよう。

#### 4 - 2 新楽器「三山」の考案

大正から昭和初期の年代に考案された代表的な新楽器には、田邊による「玲琴」のほか、宮城道雄が「十七弦」や「八十弦」「短琴」といった新型の改良琴を考案し、同様に長唄の四世杵屋佐吉も「セロ三味線」や「咸弦」といった新型の三味線を考案した。このような、新日本音楽の創造に寄与した人々の実践に触発されたものだと考えられるのであるが、後年の山内は「三山」という新楽器を開発している<sup>17</sup>。

山内は自作の三山に関して、「三線を短かくして複絃にし、音色柔か、音量大、技巧に於てポリターメント、トレモロ、ピヴレート、ピチカットもよく出る」<sup>18</sup>と解説している。そこから推察するならば、三山とは、三線でありながら西洋の弦楽器の特性をも兼ね備えた楽器とみるべきであろうか。三山のために、山内がどのような音楽作品を創作したかについては、目下のところ判明していない。だがしかし、三山という楽器名が音楽会のプログラム上に記載されているという事実は、三線の音色をそこなわずに西洋の弦楽技法の特性を発揮させた楽曲を山内がイメージし、さらには創作したであろうという推論の根拠となる。

新日本音楽の創造を担った山内は、前述したように、田邊が開発した玲琴を受け持つことにとどまらず、さらには、沖縄の伝統的な楽器である三線の改良にも意識をむけていたのだった。いや、むしろ山内は当初から、日本本土の伝統楽器や伝統音楽の革新のみならず、同様に沖縄の伝統楽器や伝統音楽をも射程に入れた意味合いにおいて「新日本音楽の創造」として認識していたのではないだろうか。すなわち、邦楽器や邦楽曲に対する「改良」という発想を、山内は沖縄の伝統楽器や伝統音楽の世界にも応用し、その結果、三線の改良楽器である「三山」の考案に至ったと考えられる。

## 5 . 総 括

戦前期の山内による音楽活動を、音楽会におけるレパートリーの推移および音楽創作という二つの観点から総括する。

明治末期にはじまる山内の音楽会活動では、まず西洋音楽に由来する既成のレパートリーにもとづいて、ヴァイオリン独奏や弦楽アンサンブル、さらには二部合唱などが実演された。このように明治末期には、洋楽器による洋楽レパートリーによって音楽会が構成されていた。その後、大正初期以降の音楽会では、三線音楽や琉球箏曲レパートリーのオリジナル楽器による伝統的な音楽演奏のみならず、さらに「琉洋調和楽」の発想に根ざした洋楽器による置換演奏も試みられていた。それと並行して大正期の音楽会では、御座楽や路次楽といった琉球国時代に特有のジャンルが復元演奏され、それらの演奏の際には、やむを得なく洋楽器が代用されていた。

さらに昭和5年頃には、山内の自作品の発表会が開催されていた。そのレパートリーをみるならば、玲琴のための器楽曲をはじめ、ダンス曲や劇音楽、唱歌や新民謡といった幅広いジャンルにわたって、山内が創作発表していたことがわかる。なかでも玲琴曲の創作は、山内が新日本音楽の創造の一端を担っていたことを象徴している。さらに言えば、後年の山内による新楽器「三山」の考案は、新日本音楽の創造という発想が伝統邦楽のジャンルにとどまらず、ひいては沖縄の三線音楽にも適応されていたことの証しとなるだろう。そういう観点において山内の音楽創作は、沖縄の伝統音楽（楽器）である三線を、新しい邦楽（新しい日本の音楽）の創造のなかに確固として位置づける試みだったと解釈できよう。

### 註

- 1 やまうち・せいひん(1890-1986) 湛水流の伝承者・山内盛薫の孫であり、琉球音楽研究のパイオニア。大正元(1912)年、沖縄県師範学校を卒業。卒業後、沖縄県内の小学校教員を勤め、上京後は京橋音楽学校の音楽教員を勤める。大正4(1915)年以降、田邊尚雄に音楽研究を師事。昭和4(1929)年以降は南島談話会に所属し、柳田國男をはじめ金田一京助などとも親交があった。
- 2 沖縄タイムス社 1993。
- 3 沖縄タイムス社 1981 : 173-204。

- 4 唱歌劇の創作年代や創作背景については、次の論文が詳しい(三島 2009)。
- 5 山内がレコード会社専属の作曲家だったことは、次の文献に記されている(比嘉 1987 : 111)(山内 1963 : 筆者略歴)。
- 6 新民謡や童謡の創作年代や創作背景については、次の論文が詳しい(三島 2009)。
- 7 その根拠として、山内は昭和9年に自作の童謡曲集を出版しているが、その自序のなかで「私は従来、民謡並に童謡等の作曲は、總てレコードに依つて發表して來た」と述べている(山内 昭和9 (1934) : 序)。
- 8 【表1】については、今後の追跡調査で、さらなる作品の追加も十分に考えられる。
- 9 【表2】のデータには一部、山内本人の回想録にもとづく情報も含まれている。
- 10 ちなみに、前述した『山内盛彬著作集』の年譜には、これらの創作曲目が記されていない。
- 11 したがって本研究では、同時代史料から判明した作品名を確定しておくことのみにとどめておくが、さりとて、これらの作品の判明は、山内の創作活動の全体像を描くうえで見逃せない事実であるだろう。
- 12 そのため、【表2】のデータにおいても、同期間における山内の音楽会活動が反映されていない。あるいは、大正4 (1915)年から昭和4 (1929)年の期間、山内は音楽会活動をおこなわなかったという可能性もある。
- 13 山内の処女作《黄金の瓜ざね》の作曲年が、大正9 (1920)年であるという推定年にもとづく。
- 14 千葉潤之介 2000 : 187
- 15 千葉潤之介 2000 : 178
- 16 「音楽、舞踊の夕：山内令晃氏の作曲発表会」『八重山新報』昭和5年8月25日。
- 17 「外遊中ペルーの大山朝一氏との共作で[以下、省略]」(山内盛彬出版記念祝賀会実行委員会主催、昭和34 (1959))と山内は記している。つまり、山内が中南米を訪れた期間に、新楽器「三山」は考案されたと考えられる。したがって「三山」の考案年は、昭和29 (1954)年8月~12月の期間だと推定できる。

18 山内盛彬出版記念祝賀会実行委員会主催、昭和34（1959）

## 出典

### 新聞記事

- 「音楽演奏会」『沖縄毎日新聞』明治44（1911）年11月30日  
「音楽演奏会」『琉球新報』明治44（1911）年11月30日  
「福音社祝賀音楽会」『沖縄毎日新聞』大正2（1913）年8月2日  
「故尚泰候十三年記念講話会」『沖縄毎日新聞』大正2（1913）年9月10日  
「慈善音楽会演奏曲目」『沖縄毎日新聞』大正3（1914）年2月4日  
「慈善音楽会演奏曲目」『沖縄毎日新聞』大正3（1914）年2月5日  
「第五回 家庭音楽会」『沖縄毎日新聞』大正3（1914）年2月8日  
「楽しき音楽会：山内氏家庭音楽会」『琉球新報』大正3（1914）年2月9日  
「発展社記念演劇」『琉球新報』大正3（1914）年3月15日  
「発展社同人大演劇会」『琉球新報』大正3（1914）年3月15日  
「発展社大演劇会」『沖縄毎日新聞』大正3（1914）年3月17日  
「音楽、舞踊の夕：山内令晃氏の作曲発表会」『八重山新報』昭和5（1930）年8月25日  
「山内氏の作曲発表：娯楽の夕」『先島朝日新聞』昭和5（1930）年8月28日

### 書籍、雑誌論文、その他

- 沖縄タイムス社『山内盛彬著作集（全三巻）』沖縄タイムス社、1993  
沖縄タイムス社『私の戦後史』第4集、沖縄タイムス社、1981  
島尻教育委員会『島尻郡誌』1937  
世禮國男『阿旦のかけ』曙光詩社、大正11（1922）  
千葉潤之介『作曲家 宮城道雄：伝統と革新のはざままで』音楽之友社、2000  
比嘉悦子「山内盛彬の音楽研究」ばららの会『ばららん』第2号、1987  
三島わかな「山内盛彬による戦前期の音楽創作～唱歌劇および新民謡ジャンルを中心に～」  
『沖縄県立芸術大学紀要』第17号、2009（刊行予定）  
山内盛彬『琉球乃音楽 楽譜』第壹集、山内鶴子、1950

山内盛彬 『民俗芸能全集III 琉球の舞踊と護身舞踊』民俗芸能全集刊行会、1963

山内伶晃 『山内伶晃童謡曲集』シンフォニー楽譜出版社、昭和9（1934）

山内盛彬出版記念祝賀会実行委員会主催

「山内盛彬 『琉球の音楽芸能史』出版大祝賀会」プログラム、昭和34（1959）、日本青年館於

与那城村立宮城小学校 『与那城村立宮城小学校創立90周年記念誌』1985